

「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書（1頁）

2010年10月4日提出

申請年度	2010年度（平成22年度）		
所属学科	文化人類学科	報告者・職氏名	教授 馬場 雄 司
海外出張内容 (種別に)	目的 タイ及びラオスにおける伝統的竹製品（特に竹楽器）の伝承に関する調査 訪問国・地域 タイ及びラオス 助成額 170,000円		・学 会 ・調 査 ・会 議 ・セミナー （発表有）
期 間	2010年8月11日（水）～2010年9月8日（水）		28泊29日
上記出張期間の研究・調査等活動経過	8月11日・・・移動（大阪・バンコク・チェンマイ） 8月12日～15日・・・チェンマイ大学にて資料閲覧・研究打ち合わせ 8月16日～17日・・・ナン県プア郡ブーカー山ルワ族村落（トゥイ村）にて、竹楽器ピを使用する稲魂供養の儀礼の調査。 8月18日～25日・・・チェンマイにて資料収集（書籍・文献）・研究会参加（チェンマイ大学社会科学部及び社会研究所、ラージャパット大学） 8月26日～29日・・・ナン県ターワンパー郡タイ・ルー村落（ノンブア村）及び同県ソクウェー郡カム族村落（ホワイモイ村）にて、竹の生態、竹編み細工及び竹楽器に関する調査 8月30日・・・ラオス・サイニャブリー郡グン郡において、タイ・ルー族、カム族の竹製品・竹楽器の伝承に関する調査 8月31日～9月2日・・・ナン県ターワンパー郡タイ・ルー村落（ノンブア村）にて、社会変化と竹林の衰退に関する調査、及びナン県ナン市におけるタイ・ルー文化振興のイベントの調査（観光と工芸品の促進） 9月3日～6日・・・チェンマイにて竹楽器・文献などの資料収集、今後の研究打ち合わせ 9月7日・・・バンコクにて資料収集（書籍購入） 9月8日・・・移動（バンコク・大阪） *バンコク出国は9月7日23時半		
研究・調査 発表等概要	<p>グローバル化の中における伝統技術の伝承に関して、竹製品の伝承全体を視野にいれ、特に竹楽器に注目して調査を行った。竹楽器は、東南アジア大陸部に広く分布しており、ミャンマー、ラオス、ベトナムにおける諸民族の竹楽器全体を視野に納める必要がある。また、タイ北部に限っても、その全容が必ずしも明らかになっていない。このため、タイ北部を中心に、竹楽器に関する文献を収集、音楽の専門家から様々な情報を得た。そうした情報をもとに、特に独特の竹楽器を儀礼の中心にすえているナン県のルワ族の稲魂儀礼に参加、竹楽器ピの儀礼における役割を調査した。更に、ナン県のカム族の村落を訪問、ケーンなどの竹楽器の利用について調査を行った。また、ナン県と接するラオス・サイニャブリー郡のカム族の村落でも同様の調査を行った。</p> <p>また、出張者が20年ほど調査を続けている、ナン県のタイ・ルー族村落においても、儀礼歌の伴奏用竹楽器ピー（横笛）がみられたが、歌い手の衰退とともに衰退した。ここでは、竹編み細工などの竹工芸品を含め、竹文化全体に関して、社会の変化との関連に関して調査を行った。竹工芸の担い手の高齢化を踏まえ、現在進行している伝統文化見直し政策の中での高齢者の役割、竹の生態とその利用の実態、竹林保存の現状など、資源開発と伝統文化保存の概要を把握することに努めた。</p> <p>主としてチェンマイ大学社会科学部の研究者と研究会議を随時もち、近年進みつつある国境を越えた開発の動きを踏まえ、諸民族の伝統文化保存の現状について議論を深め、また芸術学部の伝統音楽の専門家から、楽器に関して多くの情報を得、今後の研究協力体制を築くことができた。</p>		

「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書（2頁）

2010年10月4日提出

<p>研究・調査 発表等々の 成果の概要</p>	<p>主としてチェンマイ大学において、特に北タイを中心とする竹楽器に関する情報を、文献収集や関連分野の研究者へのインタビューによって得ることができた。また、タイ北部メーホーソーン県のタイ・マイ族の独特の竹楽器（ティントウン）を収集した。</p> <p>ナーン県のルワ族の稲魂儀礼を参与観察、竹楽器ピの演奏が前面に出ている様子を撮影、その意味などをインタビューした。竹楽器ピは、儀礼の初日（参加できず）に守護霊から付与されるものとされ、見本をもとに40本あまり作られる。村人40人あまりが演奏しながら村中を行進し、稲魂の供養を行う（行進の当日参加）。竹に稲魂が宿るものと推察される。この儀礼は毎年行われる。来年も継続調査の予定である。</p> <p>ラオスに多く分布するカム族の村を、タイ側とラオス側で訪問、竹楽器の初歩的な情報を得た。特に竹筒楽器オムティンは祖先祭祀で用いられるというが、ラオス側では、開発の進展や社会主義政策による精霊祭祀の衰退によって使用されない。</p> <p>タイ・ルーの村落では、男性高齢者の仕事として竹編み細工が行われているが、若者に対する伝承はあまり行われていない。今回、更に問題と感じたのは、森林資源の大きな変化である。タイ・ルーの人々は、筍スープを伝統料理としているように、竹と共に生きてきた。しかしながら、近年伝統的生活を支えた近隣の竹林が消滅し、代わりにゴム園が出現しつつある。主として南タイで見られるゴム園であるが、北部の比較的温度の低い環境の方が良質のゴムが採れるとのことで、近年にわかに普及し始めたようである。世代間の伝統文化の継承の問題もさることながら、こうした商品作物の普及による伝統文化の変化の側面を問題視する必要を感じた。ルワ族のような山地民の居住環境と比較のうえ、今後考えるべきテーマである。</p>
<p>研究・調査 等の成果 発表予定</p>	<p>シンポジウム・公開講座等の開催： 国立民族学博物館共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」（平成21～23年度、研究代表者：鹿児島大学 総合研究博物館 准教授 落合雪野）による共同研究会にて報告（平成23年度に報告予定）</p> <p>その他：国立民族学博物館共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」（平成21～23年度、研究代表者：鹿児島大学 総合研究博物館 准教授 落合雪野）の成果報告として出版（国立民族学博物館研究報告もしくは共著書。詳細未定）</p>